

ゆきぎのみち

日本古神
道研究会

皇紀二六六三年 九月六日 横浜定例講演会より

『大神様のご存在』

はじめに

本日は原点に立ち返って、もう一度古神道そのものからのお話を致したいと思います。

と思います。

三冊目の本が『本当の幸せを求めて』という題になっておりま
すけれども、私の方では『本当の神様を求めて』という本と『あな
たも神様に会える』という本の原稿が二つとも出来ております。

しかし、出版社の言うには、もう一寸名前が売れてからの方が
良いのだということで、出版社に止められております。

私自身がここの名称を『日本古神道研究会』というふうに命名
しております。「宗教法人にでもするのであれば、全然別の名前
にした方が良くという事をよく言われます。

しかし、大神様は、第一冊目の本『神から人類への啓示』のあ
とがきを書いてありますように、『教祖になるな。そして教団を
作るな』という事でございますので、その趣旨にそって進めて
行きたいと思っております。

古神道と 命名した由来

今日皆さんにお話をしたいのは、寧ろ『古神道』についてでございます。これは、一般の方にも、「神道と古神道とど
う違うのでしょうか」とよく聞かれます。日本で神道という言い
方をすると、大体が伊勢神宮を中心とした神道ということになっ
ております。

私の方ではいわゆる伊勢神宮を中心とする神道に対して、伊勢
神宮の御祭神でいらつしやいます『天照大御神様』にも、『伊弉
諾神様・伊弉冉神様』というご両親がいらつしやいます。従って
『天照大御神様』以前の神様ということで、『古神道』と名付けた
わけです。伊勢神宮を中心とする伊勢神道に対して、それより古
い神様のことを研究しようということで、単純に『古神道研究会』
というふうに名付けたのです。

ところが、古神道というものが、いわゆる修験道というふうな
ものを指したり、或いは特殊な術を使うそういったものを指した
り、中には言霊学とか、霊学、靈魂についての霊学、それから言
霊というふうなものも古神道に入るということを後から知ったの
です。私の方は今言ったように伊勢神宮の天照大御神様よりも古
い神様の研究をしようということで、単純に古神道というふうに
させて頂いたのです。

大元の神様・根源 の神様を求めて

私としては、『本当の神様を求
めて』ですから、古事記とか日本
書紀に出てくる神様よりも更に古

い神様。私自身はその当時はお名前がわからないものですから、『大元になる神様・根源の神様』というふうな呼び方をし、この事をひたすら求めたわけです。

お釈迦様が色々と修行をなさっておられる時に、鬼が出て来て、自分を食べようとするというふうなことが出るとか、色々なことを言っておられます。一つの幻想かも知れないし、或いは実際に本当に自分が悟りを開いたかったら、命を投げ出すかということ言っておられるものが出てくるというふうな話もございまして、けれども、私の場合にもさまざまな神様がお出ましになりました。

古事記の一番最初に出てくる『天御中主神様』とか、『天照大御神様』が直接お出ましの時もあれば、いわゆる狐、狸を始めとするものが、そういった方になりまして、もうそっくりになって出てきたことがございます。

そういう動物霊が化けて出る場合はともかくとして、本物の神様の時であっても、「私は根源の神様以外の神様のご命令には従いません。従って、本当に私に御用があるのであれば、尊い神様には違いないけれども、根源になる神様、根源の神様にお話をなさられて、根源の神様から私に命じて頂きたい。それ以外は畏れ多いことですから、一切お受けすることは出来ません」という風にしてお断りをさせて頂いたのです。

このことが後になってみれば大変良かった様でございましてけれども、その頃はまだ大神様のお名前がわかりませんでした。

単純なる疑問

私としては、そういう伊勢神宮の天照大御神様に致しましても、単純な疑問を持っておりました。

伊勢神宮にいらっしゃって、日本を守る神様として天照大御神様がいらっしゃいますけれど、一方では太陽の神様であるとも言われています。太陽自身が天照大御神様だということも伝わっておりました。

そうすると太陽であれば、何も日本だけの神様とは言えないのではないかと。地球全体を照らすことが出来るのではないかと。ふうに考えて、この日本の神様ということと、太陽神としての地球そのものを照らすのではないかとこの矛盾を感じていました。

今一つは、おっぱいの出るお母さんではなくて、おっぱいの出ないお父さんを「ちち」と言うのが良く解らなかつたのです。

こういう単純な疑問を私自身は抱いておつたわけです。おっぱいが出ないのに何で「ちち」というのか。お乳がでないのに「父（ちち）」と言うんですよね、お父さんの事を。

後でわかってみればなんでもない事ですけども、靈魂の『霊』、これは『ひ』とも読むし、『ち』とも読みます。これは精神的なものと言った方が解り良いのだろうと思うのですが、霊的なもの、或いは精神的なものとしての『ち』と身体的・肉体的なものとしての『ち』の両方を、先祖から受け継いで子孫に伝えるもの、これが「父」であるということが、後で解つたのです。つまり『父』とは、『霊』と『血』を先祖から受け継いで、子孫に伝えるとい

う意味なのです。

もう一方の天照大御神様が日本の神様であると言いながら、太陽神でもあるという点については、いま少し先になってわかったわけです。

禍つ者や 本来は神様にお名前はごさいません。で

動物霊には すから神様ご自身がお出になった時には、

ご用心 一切お名乗りはされません。ですから「われは、何々の神なるぞ」と言ってお出してくる

のは、大体動物霊です。神様はご自分からは名乗って出られませんが、逆に言うと、自然にわかるような形は取って下さるけれども、お名乗りはされないということです。だから「われは何々の神なるぞ」と言えば、それは「動物霊か何かが威張って言っているなあ」というふうに考えた方がよろしいかと思えます。

大神様は『われじゃ』と言って出てこられることはあります。

しかし、絶対に『神漏岐大神だ』とか、『御祖大神だ』などと言って出て来られることはありません。『われじゃ』と言われます。

さりとして『われじゃ』と言って出られた時には、常に大神様だとも言い切れません。

禍つ者や動物霊は、そっくり真似て出て来るからです。姿・容貌や言葉は、本当にそっくり真似て出て来ますから、なかなか見分けることは困難です。どこで見分けるかと言いますと、暖かいです。余程心を澄ませませんと、この区別は出来ません。

禍つ者や動物霊の時には、何となく冷たいものを感じ、緊張感を伴います。神様の場合には、暖かさを感じ、安堵感を持ちます。姿・容貌や言葉までそっくりですから、始めは騙されかねません。

もう一つの見分け方は、動物例の場合には、今まで思っていたことと反対のこと或いは異なったことを思ってみることで。例えば、「A子さん結婚して、東京に残ろうかな」と思うと、「そうするといい」と言う。次に「田舎へ帰ってBさんと結婚しようかな」と思うと、「そうするといい」と言う。神様には絶対にあり得ないことです。

なぜこういうことを申し上げるかと言いますと、動物霊の場合には、人の心の中を読む力を持っていますから、「それをしてやるから、何々をしてくれ」と、後で必ず要求してくるのです。

しかし、考える力を持っていませんから、反対のことや異なったことを思うと、その心を読んで即座に答えるために、「先ほどと違うではないか」と言う、「バレタか」ということになるのです。

世の霊能者と言われる人達の中には、こうした動物霊の言を、神様のお言葉だと信じて伝えている人が多いのです。ご用心です。

神様にお名前はない

神様のお名前というものは、神様同士では必要ないのです。全部念一つ、思い一つで、念とか思いというもので通ずる

のです。神様同士では、これで以って通じます。だから名前を必要としないのです。どの神様が仰っているかということもわかる